

## 研究 覚え書き

2015年にシンガポールは独立50周年の佳節を迎えた。天然資源がなく、水の供給さえも隣国マレーシアに依存せざるを得ない都市国家が、1965年の独立後、急速かつ持続的な発展を遂げ世界有数の高所得国となった。奇しくも同年、「建国の父」として発展を牽引してきたリー・クアンユー初代首相が逝去し（享年91歳）、この国は次の50年に向けてビジョン構築が始まっている。

しかし多くのものごとがそうであるように、繁栄を永続的なものとするのは難しい。ましてや世界との深い連結性に依拠する同国にとって、時に「変化」は大きな不安要素ともなりうる。ではどうしたらよいのか？ その命題に接近する際に、白石隆が著書「海の帝国」のなかで綴っている次の文章が力をもつ。「われわれは過去を振り返ることで未来を構想する。未来は過去の延長上にか構想できないからである。『いま』を見つめれば見つめるほど、われわれの想像力は『いま』に囚われ、長期的なビジョンが夢想と、近視眼的思考が現実主義と取り違えられる。」

## 「いま」に囚われない

杉本一郎

私はマラヤ大学で長年、英領期シンガポールの長期経済統計推計を行い、それを基に同国の経済発展のモデル構築を標榜してきた。しかし資料を紐解いて分かるのは、シンガポールは経済的、行政的に独立した単位ではなく、海峡植民地や、英領マラヤという枠組みの一部として捉えられてきたという点だ。英領期に華人が主要となったシンガポールがマレーシアに加わることで、土着民と移民の民族構成が政治的軋轢を生み、マレーシアから分離独立した。独立後の両国の軌跡をみると、歩みの違いが強調されるが「不変」なのは、両国は隣接し続けてきたという点だ。現在シンガポールの対岸にあるジョホール・バルとその周辺地域ではイスカンダル・プロジェクトが大きなうねりをもって進行している。

この両地域の収斂を「いま」おきている「変化」と捉えるか、それとも「不変」の必然的現れとみるかは、シンガポールの次の50年を考える分水嶺となるかもしれない。

（すぎもと いちろう／東洋哲学研究所委嘱研究員）